

## 葉集を読む

松岡 隆子

決心をせねば炎暑へ飛び出せぬ

椎名佐和子

外は太陽がぎらぎらと照りつけ燃えるような暑さである。

「いざ、出陣！」と勇猛心を奮い立たせなければとても外出などできない。最近の暑さは命に係るとまで言われる猛暑、風生の句に〈大寒と敵のごとく対ひたり〉があるが、まさに暑さは敵である。真向かつて行かねばならないのである。

椎名さんはいまご夫君の赴任先のタイで暮らしておられる。〈街騒の沸点として雲の峰〉などの一連の作品に、異国にあつても俳句のある暮しをされていることを嬉しく思う。

逃げるごと橋渡りけり炎天下

小鷹 茂代

炎天やひらと非課税証明書

平沢千恵子

共に炎天を詠みながら、それぞれの視点の違いに注目した。一句目、焼けつくような真夏の空の下、川照りに身を晒し

ながら急ぎ足で橋を渡る。この頃の夏の異常な暑さは身に堪える。一足でも早く暑さから逃れたいと足早になる。〈逃げるごと〉に実感がこもる。

二句目、作者の平沢さんはまだ50代、かつてご夫君の海外赴任に同行するため教職を退かれたと聞いている。一枚の薄っぺらな非課税証明書がなんとも侘しい。およそ俳句には向かない素材を〈炎天や〉で見事に俳句に仕立てた。〈ひらと〉という擬態語も効果的に使われている。無駄な言葉がなく省略の効いた表現はこの作者の得意とするところだ。

ねこじやらし日暮が早くなりにけり 中谷 信子

秋の彼岸が過ぎる頃から少しずつ日暮が早くなってくるが、その変化をいち早く教えてくれるのがいつも風に揺れている道端のねこじやらしだ。ある時ふとねこじやらしの辺りが暮れてきていることに気付く。毎日通るたびに見るともなく見ているねこじやらしが教えてくれた季節の移ろい、そんな些細なことに心が動かされるのも俳句をしていればこそである。

多摩川の少し遠くに秋立てり 見上 恵

中七の〈少し遠くに〉が良い。現実にはまだ夏の暑さが居座っている頃である。遠くだからこそ多摩川の水も澄んで岸辺の草々の戦きもどことなく秋めいている感じがするのだ。小さな秋を見つけた繊細な感性は、「秋来ぬと目にはさやか